

近世紀州の学問の成立

— 紀州徳川家と藩校教育の思想と歩み —

木 本 毅

近世紀州の学問の成立

— 紀州徳川家と藩校教育の思想と歩み —

The History of Learning in Kishu in Edo-Era - Kishu Tokugawa Family and the Educational Philosophy and History in its Domain Schools -

木本 毅

Tsuyoshi Kimoto

《 abstract 》

In 1603, Ieyasu Tokugawa established a feudal government (bakufu) in Edo. He soon realized that the governing a country in peacetime should be conducted according to a doctrine of administration based on moral and humanity, not to a doctrine of the government by military power, which lead to the principle of rule by virtue of the sovereign. He found its solution in the learning of Confucianism and Neo-Confucianism. Ieyasu thereby reached a conclusion that persons who engage in politics should be well-educated. He himself learned a lot from Seika Fujiwara, top Confucianist, and also from Fujiwara's follower Razan Hayashi and acquired profound knowledge about Confucianism. He had a later son (10th son) Yorinobu, and cherished and raised him with great care, keeping him always by his side. Yorinobu was, thereby, greatly influenced by Ieyasu's thought and philosophy about governing a country and also about learning.

In 1619, Yorinobu was transferred to Kishu from Sunpu. This was the beginning of Kishu Tokugawa family. Around 1635, he started Confucianism education, sending his subjects to famous scholars of Confucianism he had employed and brought to Kishu, which is thought to be the oldest education in the history of Confucious education in local domains.

Lords after Yorinobu were all influenced by him and succeeded to his scholarly policy. In 1713, Yoshimune (the 5th lord, later the 8th shogun) established a domain school (Hankou) open to both his subjects and common people. Owing to his progressive and liberal thought, the education in Kishu was greatly developed and highly evaluated by many scholars. His school was of course extremely old as a domain school, one of the early twelve schools in history.

Harutomi, the 10th lord, was by far enthusiastic in the educational administration. He founded a legitimate domain school (Gakushukann), making school regulations, close curriculum and evaluation system, inviting lots of prominent Confucian scholars and Ancient Japanese language scholars. He also founded a medical school, majoring not only in Chinese herbal medicine but also in Dutch medicine, which is considered to be the first school in history to teach western surgery. The foundation of western medical school by Tokugawa bakufu was 63

years after the medical school in Kishu. Judging from this fact, we can safely admit the education in Kishu was so innovative and progressive by all means. This fact, I'm sure, owes so much to the progressiveness and scholarly mind of Tokugawa family. Thereby medicine, especially surgery in Kishu was surpassing by all means, to say nothing of Seishu Hanaoka's operation by anesthesiology.

Mochitsugu (the 14th lord) also played an important role in the promotion of the education. He built a domain school to study Confucianism and Neo-Confucianism, as well as martial arts in order to cope with the advancement and emergency of the western powers. He also built a western science school to study European culture, language, technology and other natural sciences. Needless to say, schools were all open to the public.

We can, therefore, conclude that the promotion and prevalence of education in Kishu in Edo period owes so greatly to the progressiveness, innovative mind and enthusiastic thought on education of Kishu Tokugawa family.

1 はじめに

近世紀州の儒学・朱子学を中心とする学問と教育の振興は、偏に紀州徳川公の教育理念と施策に負うものである。

1603年、天下統一を果たした徳川家康は、江戸に幕府を開いた。戦乱の世を制した家康は、日本近世儒学の祖藤原惺窩に帰依し儒教への造詣が深く、儒学・朱子学に基づく文治政治への方向性を志向する好学の将軍であった。そして、晩年の子、頼宜（紀州徳川家藩祖）を殊の外大切に、長く近くにおいて育て教育をしてきた。

《「修身齐家治国平天下」（大学「礼記」）「君使臣以礼，臣事君以忠」（論語八佾篇）「行己有恥，宗族称孝，郷党称悌」（論語子路篇）「為君之道、必須先在百姓。若安天下、必須先正其身。」（貞觀政治要）「為政伊為徳」「君子不器」（論語為政篇）「堯・舜の道、仁政を以てせざれば、天下を平時にすること能わず」（孟子「離婁章句」）》

1609年、家康は、最愛の子（十男）頼宜を幕藩体制の拠点駿府 50 万石に配した。儒学者林羅山を侍講として儒学造詣の深い父家康の薫陶を受けてきた頼宜も学問（儒学・朱子学）に憧憬が深く、駿府城時代からも、林羅山や天海ら碩学から儒学を学び鋭意精進に励んだ。

紀州徳川家の祖・徳川頼宜（1602—1671）が駿府から紀州に入るのは、1619（元和5）年である。紀州入国時には、羅山の高弟永田善斎を伴っていた。入国後も、高名な儒学者を多数招き、1635年、開幕30年には、藩士を儒学者（那波活所ほか）の下で学ばせる儒教教育を始めている。

《「為政以徳」（論語為政篇）「君使臣以礼，臣事君以忠」（論語八佾篇）「敏而好学，不恥下問」（論語公冶長篇）

「子以四教、文行忠信」（論語述而篇）「以佚道使民、雖勞不怨」（孟子）》

紀州は、全国的にみても御三家の水戸、尾張とともに儒学の藩士教育が最も早く行われた藩である。

頼宜公の薫陶を受けた以降の藩主も儒教教育を重視する文治政策を継承することとなる。

《「君子在三楽、父母俱在、兄弟故無、一之樂也。仰不愧天、俯不愧人、二之樂也。得天下英才、教育之三樂」（孟子尽心章句）「能行五者於天下為仁、恭寛信敏恵」（論語陽貨篇）》

二代藩主光貞も、新たに多くの儒学者を招き、学問奨励の施策を継承した。

《「尊賢育才、以彰祐徳」（孟子告子章句）「作徳心逸日休、作偽心勞日拙」（書経）「君子居易以俟命。小人行險以徼幸」（中庸）「天時不如地利、地利不如人和」（孟子）》

五代藩主吉宗公（1684—1751、頼宜の孫、八代将軍）においても同様で、紀州藩初の学問所を1713年に開設し、ハイレベルな儒学教育を中心に藩士のみならず好学の庶民にも開いている。儒学を中心とする藩校は、すでに寛永年間（1624—1644）に幕府直系の尾張藩の学問所（のちの明倫堂）や会津藩の稽古堂（のちの日新館）等の例はあるが、紀州藩の講釈所も全国的にみても極めて歴史の古い学問所である。

《「学而不思則罔、思而不学則殆」（論語為政篇）「吾日三省吾身、為人謀而不忠乎、与朋友交而不信乎、伝不習乎」（論語学而篇）「君子有大道。必忠信以得之、驕泰以失之」（大学）「富而不驕者鮮。驕而不亡者、未之有

也」(春秋左伝)》

十代藩主治宝(1771—1853)は、歴代藩主の中で、最も学問に熱心で、儒学教育を積極的かつ多面的に推進した。1790年、藩校を改修増築し、「学習館」と改め、1793年には江戸屋敷内に「明教館」を設置、翌94年には伊勢松阪に郷校を開設した。藩校が全国的に急増するのは、江戸中期以降であるから、学習館等は、全国的にも歴史は古いものである。1791年、治宝は、諸藩に先駆けて、蘭方医学も取り入れた「医学館」をも創設するなど教育振興に多面的に尽力している。このように紀州徳川家による教育施策は、諸藩に比して、誠に先進的かつ開明的であった。

1853年ペリー来航をきっかけに、幕藩体制に大きな危機と混乱が襲った。それまで藩の学問は、儒学が中心であったが、海防・国防論の高まりの中で、「岡山文武場」を新設し、軍学所・剣術場・柔術場を開くとともに国学所・蘭学所をも開設した。

1866年、十四代藩主茂承(1844—1906)は、学習館を岡山文武場に統合し、「学習館文武場」とした。

1869(明治2)年、学習館は武術教育を切り離し、学問専一の場所として、国学、漢学、洋学を教える場となり、庶民の就学を認める新時代の学校となり、1872年(明治5年)「学制の発布」に伴う近代公教育に繋がるのである。

このように、江戸時代の紀州における学問とその振興は、偏に紀州徳川公の学問に対する深い見識と教育に対する豊かな知見に負うのである。

2 紀州徳川家の誕生

1609年、家康は、九男義直を尾張名古屋47万石の、十男頼宜を駿河・遠江・東三河50万石の、十一男頼房を水戸25万石の領主とした。家康の没後、二代将軍秀忠(家康公三男)は、1619年、頼宜を駿府城から西国の要である紀州藩55万石に転封した。紀州徳川家の誕生である。

3 藩祖頼宜の教育

家康の寵愛と薫陶を一身に受けてきた頼宜は、学問を好みとりわけ儒学・朱子学に造詣が深かった。入国にあたって、羅山の高弟儒学者永田善斎を伴うとともに、1626年に

は、朝鮮人儒学者李真栄を長崎から侍講に迎え、自らも儒学の勉学に勤しんだ。(南紀徳川史=堀内信)

《「学而時習之、不亦説乎」(論語学而篇)「為政以德」「禮之用、和為貴」(論語為政篇)》

さらに、近世儒学の祖藤原惺窩の高弟名波活所は、頼宜の侍講師匠に止まらず諫争輔弼の任にあたり((南紀徳川史)、儒学君主論「人君明暗図説」を著し、頼宜に君主の道を教示した。

《人君明暗図説》

明君=智仁勇、儉約、能慎、勤勞、聴諫、任賢
施濟等。

暗君=驕奢、愚忍怯の忘己、無憚、嗜殺、疑人、
吝嗇、立我等]

頼宜は、ほかにも多くの儒学者を登用し、紀州入国後早々に、藩士に対する儒学教育を始めた。李真栄や名波活所らは、私邸に藩士を招き広く儒学教育を始めた。家塾における儒学教育では、諸藩の中で、最も古いものである。1660年、頼宜は、李真栄の子梅溪と儒教倫理に基づき紀州藩の教育理念となる「父母状」を作成・発布した。

《父母状》

「父母に孝行に、法度を守り、へりくだり、奢らずして、面々家職を守り、正直を本とすること、誰も存じたる事なれども、常に下に教え申し聞かすべき也。」

《『事父母能竭其力、事君能致其身、与盟友交、言而有信』
「入則考、出則悌」「孝悌也者、其為仁之本与」(論語学而篇)》

1663年、頼宜は、儒教哲学に基づく「法令15カ条」を発し、儒学と武芸の両方に励むべきことを命じた。

《法令15カ条》「孝行を専らとし忠義に励み、文武の芸を勤めならうべき事」

《「孝悌忠信」(儒教四徳)「仁義礼智信」(五常の徳)
「孝悌也者、其為仁之本与」「学而時習、不亦説乎」「学而不思則罔、思而不学則殆」(論語学而篇)「至誠而不動者末之有也」(孟子)》

4 二代藩主光貞の教育

二代目藩主光貞も頼宜の薫陶よろしく、儒学に深い造詣を示し、李梅溪や荒川景元ら著名な儒学者を召し抱え儒教教育の振興に尽くした。また、明国の法律に深い関心を寄せ、李真栄や明国の呉五官を登用し、明国法律研究で紀州

は、全国のトップランナーとなった。

5 五代藩主吉宗の教育

頼宜の孫で五代藩主吉宗（八代将軍 1684-1751）も学問好きで儒学・朱子学に造詣深く、高瀬学山、蔭山東門、祇園南海、上野海門ら多くの儒学者・朱子学者を登用している。1713年、湊御用屋敷に「講積所」という紀州藩初の「学問所」を設立した。そして、朱子学の祇園南海と古義学の蔭山東門を長に任じ、家臣だけでなく好学の庶民にまで門戸を広げた。講義は、論語が中心で「四書（論語、孟子、大学、中庸）、五経（易経、書経、詩経、春秋、礼記）」が講じられ、学徒常時150-160を下らず、紀州の学問は、隆盛を極めた。

「吉宗善政行い、治下の民庶よく心服したこと諸記録るみに書き尽くされど……学業に心を盡し、紀勢の文教を啓発したことは、特記するに足るものがある。」（「紀州徳川学習館」より）

吉宗の「講積所」は、藩士教育のみならず好学の庶民にも開放されたことは、諸藩の藩校の多くが家臣及びその子弟を対象としていたこの時代、まさに画期的なことであった。

《講積所規則 祇園南海策定》和歌山県立博物館所蔵

1. 9月2日ヨリ毎月2ノ日6ノ日、論語講朝5ツ時過より揃申筈
2. 出席之面々貴賤士庶エラバズ、志有者ハ可能出由
3. 出席座次ノ儀ハ学館之儀候間、貴賤高下之定無……大方其身分分限二応シ可被坐次事

《「学而時習之、不亦悦乎」「温故知新、可以為師翁佳」（論語）「徳者本也、財者末也」（大学）「惻隠心仁端」「人本性善也」（孟子）「忠恕違道不遠、施諸己而不願、亦勿施人」（中庸）》

紀州藩のこうした学問の盛況ぶりには、目を見張るものがあり、当代随一の朱子学者室鳩巢は、「紀州の学問は諸国随一である」と評している。

6 六代藩主宗直及び九代藩主治貞の教育

六代藩主宗直も教育に熱心で、京都から伊藤蘭嶋を招致し、講堂と改称された学問所の充実発展に尽力した。また、明国の法律研究を一層進め、高瀬学山に命じて明律解釈書を出版させるなど、紀州藩を明律研究の最先端のレベルに押し上げた。（松下忠「紀州の藩学」）

九代藩主治貞も儒学に造詣が深く、伊藤蘭嶋等多くの儒学者を講師に、城内で月6回の講義を開かせ、自らも臨席して学んだ。

7 十代藩主治宝の教育

十代藩主治宝（1771-1853）は、歴代藩主の中で、学問振興に最も功績大なる藩主である。1791年、治宝は「講堂」を「学習館」と改め、高名な儒学者山本東藤を督学（校長）に抜擢し、その運営にあたらせた。就学年齢は、8歳~30歳とし、全ての家臣とその子弟に学習を義務付け藩士教育を専らとする教育機関であった。授業は、素読、講積、会読の三段階で行われ、学力の習熟に応じてそのステップを上がる仕組みになっていた。授業時間は、素読は、毎日午前8時ごろから正午まで、講積は、午後2時から4時まで、会読は、正午から2時まで行われた。

《学習館学規 規則十條 1791年》（和歌山県立博物館所蔵）

1. 学問は朱学を主として他説を交えない。訓詁の末に関して大儀通ぜぬようでは困るから、
*適宜案配よく講積すること。

（*1790年「寛政異学の禁」に配慮した表現）

2. 儒者の用務は、文に博くして禮を簡約にする。
3. 今の学者は人の為にして、境に己を喪ふ。須らく名利に走るの念を断ち、人に教う。

《学習館規則 1793年山本東藤作成》（和歌山県立博物館所蔵）

1. 学問は、宋学（朱子学）を主とする。
（「寛政異学の禁」に配慮した表現）
2. 督学（校長）の下に講官、通官、授読、筆記を置く。
3. 家臣の教育に当たること。

学習成果をチェックする試験は、素読試験と弁書、判事と策問の4種類で行われた。素読試験は、「四書・五経」の読み方で9段階に評価された。弁書は、会読生に行われるもので、儒学・朱子学の漢籍の解釈や所見を述べるものであった。判事と作問は、最も高度な試験で、判事は、政治課題についての論述で、作問は政治課題と四書・五経の經典の解釈を漢文で論述させるものであった。成績優秀者には、藩主から褒美の賞が下賜され、作問の優秀者にあつては、藩の重要なポストに登用されることが多々あった。文字通り文治政治の時代であった。治宝は、儒学者・朱子学者を積極的に招致し、山本樂所、仁井田南陽、菊池衝岳、

川合春川等、多数の儒学者が学習館での教育に当たり、紀州の儒学は、その最盛期を迎えた。

《「老者安之、朋友信之、少者懐之」(論語)「在上位不陵下、在下位不援上、正己而不求於人」(中庸)「居上克明、為下克忠、与人不求備」(書経)「凡人之所以為人者、礼儀也」(礼記)》

また、治宝は、国学にも深い関心を示し、伊勢から当代随一の国学者本居宣長を呼び寄せ、「源氏物語」「万葉集」「古今和歌集」等の講義を聞くなど国学の振興にも尽力した。宣長の弟子本居大平は、紀州に招致・移住し、当代一級の地誌・歴史書「紀伊続風土記」の編纂に関わるとともに江戸及び和歌山に開設された国学所で 1000 人を超す多くの国学者を育て、紀州国学の普及・振興に大いに貢献した。

治宝の教育振興・学校づくりは、停まることがなかった。学習館開校の翌 1791 年、城下に「医学館」を創設し、さらに翌 1793 年には、江戸屋敷の中に「明教館」を開いた。さらに、1804 年に、「松阪学問所」を開校する等(南紀徳川史)、教育振興に大なる役割を果たした。

「医学館」の開設は、全国に先駆けるもので(仙台医学館 1817 年、シーボルト鳴滝塾 1824 年、水戸弘道館医学館 1843 年、大阪適塾 1838 年、幕府西洋医学所 1856 年)、紀州徳川公の教育は、まことに先進的なものであった。(最古の医学館は、熊本肥後藩の漢方医学再春館 1756 年。)

西洋医学も取り入れる医学館としては、紀州は最古の歴史を持つものである。

開設学課も診療学、生理・解剖学、薬物学、衛生・病理学、伝染病学、内科学、産婦人学、小児学、眼科・咽喉・歯科・外科・創傷学と今日の大学総合病院よろしく多岐領域をカバーするものであった。しかも、外科は、「明紅毛之薬術」とあって、当時珍しい蘭方医学についても教授するものであった。(和歌山県誌第二巻)

この意味においても、紀州の医学は、蘭学にも眼を向ける等、極めて開明的で、日本の医学をリードするものであった。このことは、吉宗公(五代藩主・八代将軍)の西洋科学・技術への理解と見識が影響したと考えられる。

《医学館規定 蝦又玄策定(1793)》

1. 初めに儒学を学ぶこと。
(幕府の西洋医学禁止方針に配慮した表現。)
2. 講習は、正午から黄昏まで行うこと。

3. 春秋 2 回の物産会には、難解な薬物や珍品を持参、互いに検討を重ねること。

4. 木製人形で、経絡やツボを教えるが、夏には生徒が自ら実験台となること。

5. 学力査定のため月 2 回の論題を出し、成績次第で席順変更および終了認定とする。

[時代的背景]

1771 年 前野良沢・杉田玄白「ターヘル・アナトミオ」(解体新書)、

1791 年 幕府の漢方医学所開設

1824 年 シーボルトの鳴滝塾

1828 年 シーボルト事件、1839 年 蛮者の獄

1861 年 幕府の西洋医学所開設

1804 年 世界で初めて麻酔による外科手術に成功した医聖華岡青洲も自分の私塾春林軒で教えるとともに医学館でも教鞭をとるなど、紀州の医学は、非常に高いレベルにあった。

トリカブトと朝鮮朝顔等を主成分とする麻酔薬による青洲の外科手術(乳癌摘出)は、世界でも以前には全く例がなく、アメリカの外科医 T. モートン(William Thomas Morton)が、エーテル吸入法により無痛外科手術に成功するのが、1846 年、すなわち半世紀も後のことであるから、青洲の偉業は、まさに革新のイノベーションであった。この青洲の偉業に学びたいと、医療私塾「春林軒」(那賀町)と「合水堂」(大阪淀屋橋)に、2,000 名を超す医師が門を叩いた。文字通り、紀州の医学は、世界の外科医学のトップに君臨するものであった。

1863 年、医学館では、蘭方医学の種痘を実施している。日本で最初の種痘は、1847 年、シーボルトの鳴滝塾で学んだ蘭方医伊藤玄朴(蘭学塾象先堂開塾、幕府奥医師、後世西洋医学所取締役)が実施したものであるが、そのわずか 15 年後に紀州の医学館で実施されている。また、ここでは、施薬局も設けて貧しい庶民のために無料投薬も行っていたことは、まさに「医は仁術」の医療行政が行われていた。医学館は、1869 年(明治 2 年)明治の藩政改革により幕を閉じるが、創設以来 80 年にわたり、医学の進歩・研究をリードするとともに、医師の養成に、庶民を含めた紀州人の医療・保健に大きな役割と貢献を果たした。

8 幕末期十四代藩主茂承の教育

幕末を迎える 19 世紀後半になると、藩校教育にも大きな変化が襲ってきた。1854 年、幕府は、日米和親条約を結んで開国すると、蘭学を通して自然科学や人文科学の学問が求められるようになってきた。紀州の藩の学問は、藩祖頼宜公以来、儒学が中心であったものが、蘭学を通して、西洋文化や科学技術を取り入れることが歴史的必然のニーズとなってきた。

江戸屋敷内では、文武場の開設とともに蘭学所が開設され、蘭学者としてシーボルト門下生で高名な蘭学者の竹内玄同や伊藤貫斎、柳川春三、後世藩の執政となる津田出などが教授として招かれた。

1854 年、幕府が開国すると、和歌山城下においても、十四代藩主茂承（後世県知事）は、外国船来航に備え海防強化のため、1856 年、城下に「岡山文武場」を開設するとともにその中に「蘭学所」も併設した。しかし、儒学・朱子学教育中心の藩校では、蘭学の指導者確保に、大きな困難が伴った。そのなかで、緒方洪庵の適塾で学んだ池田良輔が招かれ、語学（蘭語、英語、仏語）や兵学の教授が行われた。

1866 年、学習館をこの場に移転し、「学習館文武場」とした。そして、就業年限を 30 歳から 50 歳としたことで、200—600 名の生徒は一気に数倍に膨れ上がった。学習館はそれまで藩士の教育機関であったのを漢文の素読試験に関しては、庶民の参加も許可した。吉宗公の「講釈所」の士庶平等教育理念の復活であった。

1869 年（明治 2 年）維新の藩政改革で新設となった学習館知事には、浜口梧陵が着任した。梧陵は、学習課程を定め、学則を改訂し士族以外の庶民も入学を認めた。

1870 年、藩の洋学所として「共立学舎」が設立され、蘭英文法、地理、物理、化学、歴史等、高度な洋学教育が行われたが、翌年には廃校となった。

1872 年、学習館は、廃藩置県により廃校となり、藩校教育 160 年の歴史に幕がひかれた。

この時期の紀州藩は、藩の費用で、梧陵と交流の深かった福沢諭吉の慶応義塾に多くの学生を入学させ人材育成に努めた。この学校には、地元の東京を除くと紀州からの入学者が最も多く、小泉信吉（後世慶応義塾長）、菅沼政経（和歌山師範学校長）、鎌田栄吉（慶応義塾長・文部大臣）、松

島剛（地理学者）等多くの人材が輩出している。（「和歌山県史」近現代資料）

幕末の頃、学習館助教となった川合鼎（藩儒官川合春川の養子）の娘川合小梅（夫は藩儒官川合春川の婿養子川合豹蔵、1857 年学習館督学となる）が、幕末期の学習館の様子を日記に記している。

《小梅日記》（和歌山県立博物館所蔵）

1847 年 6 月 3 日 策問御試の為（父）早朝より出。11 人程できず。落第も可也と心配。

1851 年 此節学校大いに衰微にて嘆かわしき也。

1857 年 2 月 15 日（夫）午前講釈。

3 月 7 日 殿様学習館へおなり。豹蔵へねぎらいのお言葉かける。

4 月 28 日 豹蔵、中奥詰に昇進。

6 月 10 日 豹蔵奥にて御学問お相手。

1859 年 5 月 27 日（豹蔵）早朝より学校へ行。御試也。弁書罷出候、人数三十人。一番、松平……末江川……也。いずれも論語・孟子・礼記之内也。

1859 年 11 月 26 日 今日学問御試に出候面々江御褒め御銀頂戴のよし。皆禮に来る。

1861 年 2 月 19 日 学校積奠に付行。弁当持たせやる。（積奠＝孔子のお祀り）

1865 年 2 月 1 日 雄輔（豹蔵・小梅の子）学校講釈会に付き、出勤。今日は大勢出候。

1867 年 3 月 7 日 御上（茂承公）学習館へ被成、講釈ご聴聞、御供揃、講釈 13 人。

1867 年 3 月 19 日 御上（茂承）学習館へ被成、和学講釈ご聴聞。本居中衛講釈。

1867 年 4 月 4 日 今日左門殿…学習館お立ち寄りに而、授読五人江講釈御聞被也候由…雄輔も出勤。論語講釈相勤める。

1867 年 4 月 25 日 於城講釈。早昼出勤、願書二通差出。一つは…。一通は、素読御試、去年より…春秋に有之筈に付、右も可取候歟。

9 まとめ

江戸期における紀州の学問は、藩祖徳川頼宜公以来十四代藩主茂承まで、綿々と引き継がれていくことになる。学

問の中心は、儒学・朱子学を中心に律令学や国学そして医学であるが、やがて、開国という時代的要請から、兵学、武道、さらには蘭学、英学、自然科学、人文科学の洋学等、多岐分野にわたるものであった。

藩校教育は、基本的には、諸藩と同様、藩士のための教育機関であるが、紀州においては、好学の庶民一般にも道が開かれていたことは、誠に開明的で進歩的ではある。それは、ひとえに紀州藩主の学問的知見と見識によるものである。戦乱・下克上の時代が終わり、徳川幕府(1603-1867)の時代を迎えると、武断政治から文治政治への移行と封建社会制度を支える「儒学・朱子学」の哲学および倫理的バックボーンが求められるという社会的・時代的にニーズを認めつつ、「儒教」の人間としての在り方・生き方、学問の意義・あり方を問う哲学的価値観が教育の礎となったことは、歴史の必然である。それを歴代紀州徳川家が綿々と引き継いできたことには、大きな教育的価値観が認められる。しかも、こうした藩校教育が、諸藩の場合と同様、維新後の日本の近代公教育の礎となり、エネルギーとなり、発展・進化していくこととなる。

維新後の近代公教育が、極めて短期間で欧米列強の教育レベルに追いつく歴史的奇跡は、私塾・寺子屋の教育充実とともに諸藩における藩校教育の充実・進展が大きな役割を果たしていることを改めて認識・評価するものである。

《参考文献》

- 「儒教入門」土田健次郎 東京大学出版会 2016年8月30日
「徳川日本の思想形成と儒教」佐久間正 ペリカン社 2007年8月
「論語」貝塚茂樹訳注 中央公論新社 2011年7月30日
「孟子」貝塚茂樹 講談社 2012年5月21日
「学制120年史」文部省 ぎょうせい 1992年11月1日
「概説近代教育史」土屋忠雄編 川島書店 1991年3月20日
「和歌山県教育史 第一巻一通史編1」和歌山県教育委員会 2007年3月31日
「和歌山県教育史 第三巻一史料編」和歌山県教育委員会 2007年3月31日
「江戸時代人づくり風土記 30 和歌山」安藤精一監修 農山漁村文化協会 1995年6月30日

「柑橘花く處 紀国の文芳とその武薫と一紀伊徳川家学習館」和歌山県立図書館 1969年

「紀州の藩学」松下忠 鳳出版 1974

《学習館学規 規則十條 1791年》和歌山県立博物館所蔵
《講積所規則 祇園南海策定》和歌山県立博物館所蔵

《学習館規則 1793年山本東離》和歌山県立博物館所蔵

《医学館規定 蝦又玄策定(1793)》和歌山県立博物館所蔵

「和歌山県史」近現代資料 和歌山県立博物館所蔵

「小梅日記」川合小梅 1804-1889 和歌山県立博物館所蔵

「南紀徳川史」堀内信 名著出版 1972

「和歌山県誌二巻」和歌山県

「教育学概説」木本毅著 日本印刷出版 2017/2015年4月

「教育制度論」木本毅著 日本印刷出版 2017/2016年4月

「教育行政学」木本毅著 日本印刷出版 2014年4月1日